
少年メランコリィ

秋虹 アツタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年メランコリイ

【Nコード】

N1199B

【作者名】

秋虹 アツタカ

【あらすじ】

僕と心中したがる彼女。僕は彼女に恋をする。でも彼女は、幼馴染の君に恋をする。僕と彼女と君と。メリーゴーランドは回り続ける。ぐるぐる、ぐるぐると。 - 青春時代の恋愛と友情、生と死を、淡くリリカルに表現してみました。

第一話（前書き）

元々短編だったものを、連載用に書き直したものです。

第一話

僕の愛する彼女が誰よりも愛した君へ

・少年メランコリイ・

それなら私と心中しないかと彼女に提案されたのは、日の沈みかけた時間の校舎の屋上でのこと。

いつものように授業が終わった後に、夕風に当たりに来ただけなのに。いつもと違ったのは、何故か彼女がそこに座っていたということ。

何がどういった展開で『それなら私と心中』という方向に話が進んだのか、僕には上手く理解出来なくて、ただただ立ちつくした。僕の頭が悪いのか、それとも彼女の特異な性格のせいか。そもそも彼女とは一度も話したことがなかった。

今日は風が冷たい。びゅうびゅうと駆け抜ける風は、秋の匂いを運んできた。

「待ってくれ、話を整理しよう。まず君は自殺をしたいと？」

「そうね」

彼女の長い睫毛が、夕日をのせてふさふさと揺れた。

「それは何故だ？」

「そうね…あなたは今十七歳で、私も十七歳よね。そして例えば遊園地のメリーゴーランドに乗るとする。周りには無邪気で素直な子供達ばかり。するとどんな気持ちになるかしら？とても恥ずかしくなって、すぐにでも降りたい気持ちにさせられないかしら。それと

同じ気持ちで、私は今すぐにでもこの日常から居なくなってしまうの。わかるかしら」

わかるような、わからないような。

しかし分かったところで、何故自殺ではなく心中なのか、それが疑問であつた。

いや、別に心中が嫌なわけじゃない。むしろ良いタイミングだと思つていた。

学校で虐めにあつていたりとか、借金を負つていたりとか、不治の病に冒されているとか、そういった類のエピソードは残念ながら僕には無い。だが、理由もなく自らの死について考えるようになったのはいつからだろうか。ベットの中でその日一日起こつた出来事を思い返し、その延長上に自分の様々な死の想像を結び付け、眠りに落ちる。そんな毎日を繰り返していたら、気づけば死は僕の身近な存在に。

「怖くはないのか？」

という質問に、彼女は自分の手を前に突き出し、その先を見つめながら答えた。

「年間日本で何人の自殺者がいるか知ってる？三万人よ。そして私達がその三万分の二になる、それだけの話」

最後に彼女の口角が少しだけ上がった。

こつという笑い方を僕は知っている。何かを馬鹿にした冷たい笑いだ。

彼女が笑つたのは、世間に対してか、それとも彼女自身に対してか。

「二つて何だ。何故僕をそこに含める？」

「あら、嫌なの？」

「別に嫌じゃないが…」

「ならいいじゃない」

今度は目も一緒に笑つた。彼女の笑顔は一緒に淡い秋の香りも僕に運んできて、何だか心地良かった。素直に彼女を綺麗だと思つた。

屋上。夕方。少年。少女。
僕達は心中を約束した。

僕はそれから彼女といることが多くなった。

互いに時間が空いた時は、屋上で楽しくお喋りをする。

もっとも、話の内容は死に関することばかりであつたけれど。首吊りは嫌いだとか、寿命で死ぬのは悪くないがそこまでは待てないとか。

でも内容はどうであれ、僕は何か暖かい気持ちになつていたのは事実だつた。

そんな彼女と、僕の幼馴染の君が仲良くなるのに時間はかからなかつた。

三人でいる時も話の内容は相変わらず、死に関することばかりだつたけれど。

しかし君は、僕や彼女と違って死ぬのは怖いと言つていた。心中には参加しないと。

彼女は君に興味を抱いている様子だつた。僕はそんな二人をじつと眺めていた。

君は僕とは違って性格も明るく、自分の意思をしっかりと持つていて、でも程よくだらしない性分で、いつも周りに人が集まつていた。

僕はといえば取り立てて人に自慢出来るような事は何一つ無くて、人より得意なものは暗算の速さくらいなものだつた。

その上僕は卑屈で冷たくて、どうしようもなく汚れた人間だから、ある時君に尋ねたんだ。

――君はどうして僕なんかと一緒にいるんだ。幼馴染ゆえの義務感からか？それとも僕みたいな人間と一緒にいることで、優越感にでも浸りたいのか？

次の瞬間僕は宙を舞つていた。いや、正確には舞わされていた。

君の右拳に。

――くだらないこと言うんじゃない。そんな事考える暇があったら……怒鳴っている君の顔が赤かったのは、多分夕日のせいだけじゃない。

――…暇があったら？

――…考えてなかった。勢いで言っちゃったから。とにかくだ、そんなくだらない事いちいち考えてるんじゃないよ。

鼻の頭をぼりぼりとかいた君の顔がさらに赤くなったのは、多分怒りのせいだけじゃない。

――ほっぺた、痛い。

――さすがに殴ったのは悪かった。お詫びにジュース奢るから。

そう言った君の爽快な笑顔といったら、なんとも僕には眩しくて、ますます何故僕なんかと一緒にいるのか分からなくなったけれど、何だか心地の良い気分になった。

君の背中が、少し大きく見えた。

第二話

次の日も、そしてまた次の日も、気付けば僕達三人は毎日のように夕日の差し込む屋上でお喋りをしていた。

君は、死にたくはないけれど、あえて死ぬなら何か人のためになつて死にたい、とか。

彼女は、死ぬなら誰かと静かに死にたい、とか。

僕は、とりあえず死ねれば何でもいい、とか。

お喋りをする時の君はいつも『キャラメルコットン』というお菓子みたいな名前の煙草を吸っていた。

「美味しいのかそれ？」

僕が尋ねると、君は吸っていた煙草を僕の前に差し出した。

「甘くて、ほんの少し幸せな気分になる。吸ってみるか？」

一口、煙を中に入れた途端、それはまさしく煙の味しなくなくて僕は咳き込んだ。

「不味い。とても不味い。ちっとも甘くないし幸せにもなれない」

「この味が分らないとは不幸なやつめ」

君は僕から煙草を取り上げると、またあの時のように爽快に笑った。

僕は何だか照れくさくなって、わざとしかめっ面をした。

彼女は僕達のやり取りを、長く黒い髪を揺らして、くすくすと笑っていた。

君もつられて笑った。そして君と彼女の目が合う。

彼女は頬を赤くして、すぐさま君から目を逸らした。

その時、自分の胸が痛みを覚えたのを初めて自覚した。

ふと思ひ出す、彼女の笑顔、自分の手先を眺める癖、寂しげな瞳の色。

自分でも驚いた。気付けば僕はこんなにも彼女のことを見つめていたなんて。

どうやら僕は彼女を好きになっただけらしい。

その旨を君がいなくなっただけ彼女に伝えると、あらそう、と言われた。

僕はいつもと変わらず平静な彼女を上から見下ろしていた。

彼女はいつも座っている。僕は立っていたけれど。

「あなたにも人間らしい部分があったのね、良かったじゃない」

「そうだな。良かったよ」

彼女はそれ以上特に何かを言う様子はなかった。僕もそれ以上は求めなかった。

頬に当たる風がひんやりとして気持ち良い。彼女も気持ち良かっただろうか。

風にのった吹奏楽部の楽曲が、僕達を通過して空気に溶ける。

「私達の学校の吹奏楽部ってさ、下手よね」

「うん。下手だ。あ、今もホルンが音を外した」

何となく可笑しくなって、僕達は笑った。

夕雲が穏やかに流れる。その奥に飛行機のシルエットが見えた。

「あれだけ大きな飛行機も、遠くに離れるとあんなにも小さく見えてしまっただけだ」

「ええ、そうね」

「小さいなあ」

「ねえ」

「うん」

「あのね」

「うん」

私は彼を好きになったみたい、という言葉で彼女はそつと吐息に乗せた。

「君にも人間らしい部分があったんだね、良かったじゃないか」
「そうね。よかったわ」

「僕達は、よく似てるね」

「そうね、似てるね」

僕達は、また笑いあった。

僕達の笑い声が、風に乗ってどこかへ飛んでいって、誰かへ届けば良いと思った。誰かを少しでも幸せにできたら、良いと思った。

「じゃあ、もう心中はしないのか？」

「何で？」

「好きな人が出来たんだらう。なら生きようとは思わないのか？」

「いいえ、その逆ね。むしろより消えたくなくなってしまったわ」

「何故？」

彼女は少し俯いて、続けた。

「彼は輝いているわ。とてもとても眩しく。だから近づけば近づく程、私の汚れが照らされる。私は今まで気が付かなかった自分の汚れを目の当たりにする。理解していた事と、実際にその目で見る事は違うの。彼のようになりたいと、彼に少しでも近づこうとすればするほど、理想の自分と本当の自分とのギャップの大きさに吐き気がする。その上彼は純粹で無垢。メリーゴーランドに乗ることが許される人間よ。でもね、私は違うの。メリーゴーランドに乗るにはもう大人になりすぎてしまった。余計な知恵が沢山ついてしまった。汚いことを考えるようになってしまった。だから私は降りるわ、メリーゴーランドから。それが理由よ」

僕は何も言わなかった。彼女も僕に何かを求めている様子はなかった。

いつの間にか、夕雲が大きく形を変えていた。

「もうすぐ夜が来るわね」

「そうだな」

「そしたらきつと、彼は星空が綺麗だと言って、私は街のネオンが綺麗だと言うのよ」

彼女の言葉は未来を意味していたけれど、瞳の色は未来なんか見ていなかった。

「あなたは？」

「僕は多分、どちらも綺麗だとは言わない」

夕雲は完全に形を失って、紫色の空に溶けてしまった。

飛行機も、もう見えない。

「ねえ」

「うん」

「あなたは私と心中する気、まだあるの？」

「僕自体に心中する気なんて初めから無いさ。僕はいつでも一人で死ぬからね。でも君が僕と心中したいというのなら、僕は君と心中しよう」

「一人で死ぬのは嫌なの。手伝って」

「うん。わかった」

僕は実際のところ、本当に死にたいのかよく分からなくなっていた。

ただ彼女の赤い頬を思い出す度、そしてそれが自分に向けられたものじゃないと理解する度、胸の奥がきしきしと締め付けられて何とも言えない痛みが疼く。

それでも僕は、多分嬉しかったんだと思う。この痛みが何だか、とても大切なもののような気がして。

だから僕はこの痛みを、自分の中で暖めるようにしまっておくことにした。いつか離れても孵れば良いかと、下らないことを考えながら。

第三話

季節は流れていく。雲の色も、風の匂いも、穏やかに、しかし確実に変わっていった。

でもいくら冬の音色が近づいてきても、僕と彼女の気持ちに変化はなかった。

彼女は確実に自分の終わりへと歩んでいき、僕はやっぱり死にたいのか死にたくないのかよく分からないまま、彼女の一步後ろを歩いて歩く。

あれはそんな時だった。そう、確か僕が今まで見た飛行機雲の中で、最も長いそれが虹のように空にかかった日。君と屋上で二人つきりになった時のことだ。

「あれ、長いな」

「うん。長いね」

顔に金網の後が付いてしまつくらい、君は顔をぎりぎりまで外へ出そうとした。

「すごいな」

「うん。すごいね」

「あんなに長い、俺初めて見た」

「うん、僕も初めて」

「虹みたいだ」

いささか興奮気味の君の目は、いつにも増してきらきらしていた。そしてやっぱり君は、キャラメルコットンをぶかぶかと口にしていた。

その様子はまるで、キャンディーをなめながら虹を嬉しそうに眺める少年みたいだった。

「なるほど…メリーゴーランド、ね」

「ん？」

「いや、何でもない」

「何だよ。言えよ」

「何でもないってば」

「ふうん。…頑固な奴め」

そう言った君は、僕の右腹部に拳を入れてきて、僕はそれに少しの苛立ちと恥ずかしさを覚えた。けれど真横で咲く君の例の爽快な笑顔を見たら、そんなものは吹っ飛んでしまった。

なんでこんな奴が、と思ったけれど、ああ だからこいつなのか、と納得してしまった。

僕がそんな事を考えているとは知らない君は、遠くの夕日をその瞳に映したまま、言った。

「なあ俺さ、好きな子、出来た」

最初に少しだけ、心臓がいつもより大きく動いた。それからゆっくりと、鼓動が加速していくのを感じた。

「ふうん。誰？」

「えつとな…あのな…」

僕は、君の口から次の言葉が出てくるのをひたすら待った。

時間にしたら数秒の出来事だったかもしれないけれど、僕にはとてもとても、長く感じた。

そして照れながら言葉を綴り出した君の口から、彼女のものとは違う名前が出てきた時、僕の中に沸き起こったあの感情の名前はなんと言うのだろうか。

とても静かで、でも重くて、体の中から僕を食い尽くしてしまうんじゃないかと思った、あの感情の名前は。

彼女と君が恋人同士にならなくて良かったという自分と、彼女と君が恋人同士になれないことを悲しむ自分との間に挟まれ、目が回る。吐き気がする。

「なあ、月並みだけど、生きていれば幸せなことがあるはずだ。俺はやっぱり、お前達には死んでほしくない。お前にだってきつと…」

「生きていれば幸せなことがある？そんなこと何故分かる。それは君の話であって、僕の話じゃない。君と僕では違うんだ。君の知っ

ている僕は、きっと本当の僕じゃない。」

メリーゴーランドの回転が、みるみるうちに加速する。

「本当の僕は卑屈で冷たくて、どうしようもなく汚れた人間だ。今だって、君の恋を素直に喜べないし、かといってその理由も話すことも出来ない。」

僕は、この回転の速さについていけない。

「もう、放っておいてくれ。僕のことは、もういいんだ」

目が回る。

吐き気がする。

苦しい。

それなのにどうして…。

どうして君は平気なの？

「おい、ちよつと待つ…」

君の言葉を最後まで聞かず、僕はそこから駆け出した。

君の顔は、見れなかった。

空に架かった雲のアーチは、僕にはやっぱり雲にしか見えなくて、それが益々僕の足を速く動かした。

終わりに向かって一歩先行く彼女を、追いついてしまふほど、僕の足は速く動いた。

「どうしたの。暗い顔して」

相も変わらず彼女と僕は、夕日の絨毯の敷かれた屋上にいた。

多分君が来なかったのは、僕と顔を合わせる事に気が引けたからだろう。

「この前から様子が変わんだ。」

「どういった風に？」

「君のように言うならば、メリーゴーランドの回転が速すぎて、目が回る」

体の外も、内側も、すべてが黒く、重く、静かに僕を蝕んでいく。

ふと、頭上の貯水タンクがくり出す影を見てみた。ちつぽけな影だ。

でも、いくらちつぽけでも、それが影であることに変わりはない。

辺りを囲う金網も、緩やかに流れる雲も、自由に大空を飛びまわる鳥でさえ、影をつくる。

光輝く君に憧れながら、近づいた彼女も影をつくる。僕の後ろにも、きつと影が出来ている。

彼女は君に近づく。けれども君は別の場所へと歩いていく。メリーゴランドは一方通行だ。彼女は君に追いつけないし、君も決して、彼女を待たない。彼女から背を向けたままの君は、そんなことすら気付かずに。

メルヘンチックで、でもどこか間抜けたメロディが延々と流れ続ける。

君はどこへ行くのだろう。

僕はどこへ行くのだろう。

どこに行けば良いのだろう。

終わりのベルが、鳴る気配は無い。

「なあ

「なに

聞き返して、僕を見上げた君の表情は、大人というには無邪気で、少女と呼ぶには疲れた顔をしていた。

「降りようか。メリーゴランドから」

「あなたから言い出すのは、初めてね。でも理由は聞かない。その意志だけで十分よ」

「決行は、明日だ」

「分かったわ」

屋上。夕方。少年。少女。

僕達は心中を決意した。

最終話

僕の愛する彼女が誰よりも愛した君へ。

僕は卑屈で冷たくて、どうしようもなく汚れた人間だ。

君が彼女とは違う人間に恋をした、と聞いた時、僕の心は真っ黒になった。

心だけじゃない。僕を取り巻くものすべてが、僕には真っ黒に見えた。

卑屈で冷たくて、どうしようもなく汚れた人間の僕は、それすらも君のせいにした。

君がどこへ行くのかも、僕はどこへ行ったら良いのかも、分からなくなってしまった。

そんな僕が愛した彼女は、どこへ行くのか分からない君を愛した。彼女はひたすらに君を追いかけて、自分の汚れを目の当たりにした。自分の汚れに絶望しながら、理想の自分と現実の自分との溝に絶望しながら、それでも彼女は君に近づこうとした。

しかし距離は縮まらない。メリーゴーランドはぐるぐる、ぐるぐる回り続ける。

回って回って、吐き気がした。

それでも僕達は、自分の出来ることをやってきた。

終わりのベルが、鳴る気配はない。それなら僕達は、自分の足でメリーゴーランドを降りようと、決意した。

何度も見てきた、夕方の屋上。

彼女は今、泣いている。

ああ、どうして。

それなのに、どうして。

どうして君は、死んでしまった。

どうして君が、死んでしまった。

夕日に反射した彼女の涙が眩しくて、痛い。

「交通事故だったそうね。飛び出した子供を、助けようとしたらしいわ」

震える声を、必死に抑えている彼女の姿を、僕は直視出来なかった。

「彼らしい最後ね」

「ああ、そうだな」

「私達が心中を決意した日に死ぬなんて、世の中って皮肉ね」

愛した人を『亡くなる』ではなく『死ぬ』と表現したのは、彼女らしかった。

「なあ」

「なに」

零れ続ける涙を、一度も拭おうとしない彼女に、尋ねてみた。

「彼が死んで、悲しいか？」

「どうなんだろう…悲しいんだと、思う」

彼女は自分の手先を見つめながら、続けた。

「正直、よく分からないの。どうして涙が零れるかも、どうして私達じゃなく彼が死んでしまったかも。ただ分かっている事は、私の消えようという思いが弱まったってこと。でも、そう考えると、結局は彼の死を悲しんでいる事になるのかしら」

彼女の瞳は、死ぬのを諦めかけた人間のものにしては、弱々しかった。

彼女はいつも座っている。僕はいつも立っているけれど。

「僕は、違う」

鼓動が高鳴る。胸が苦しい。それでも僕は言葉を続けた。

「僕は、彼の死を悲しんでなんかいない。僕は卑屈で冷たくて、どうしようもなく汚れた人間だ。僕はいつも、自分のことしか考えていない。彼が死のうが生きようが、僕には関係のない事だ。彼のことなんかどうでもいい」

「なら、どうして」

息が上がる。顔が熱い。それでも僕は言葉を続けた。

「結局、彼が僕に残したものなんて、ちっぽけなものではなかったんだ。僕の中に、彼の面影なんて残ってはいない。」

「なら、どうして」

「彼は、自分の生涯を終えた。それだけの話だ」

「なら、どうして」

彼女の瞳が、まっすぐに僕を捉えた。

「どうして、あなたは泣いてるの？」

胸が苦しい。息は上がりっぱなし。顔は火照って、鼓動はどんどん加速する。

涙が、止まらない。

霞んだ視界の先に映る、君の爽快な笑顔。

鼻水で詰まった鼻の奥で香る、キャラメルコッタンの香り。

「なんだよ…これ」

結局、僕は――

「なんでだよ。どうして泣いているんだよ僕は」

結局、僕は、彼女と同じで、普通の人間だったということだ。

卑屈で冷たくて、どうしようもなく汚れた人間。それでも君の死に涙を流す、そういう人間だったということだ。

「なんだか、馬鹿みたいだ」

「そうね、馬鹿みたい。自分をけなして、それでも強がって。本当は彼の事が大好きなくせに、自分と彼じゃ違うと言って、わざと離れて。本当に馬鹿みたい」

「ああ、本当に馬鹿みたいだ」

「私も、同じ馬鹿だけど」

「ああ、同じ馬鹿だ」

僕は彼女に恋をして、彼女は君に恋をして、僕は君の死に涙する。何故だろう。少しでも可笑しくなって、僕は笑ってしまった。すると彼女もつられて、笑ってしまった。

それが何だか心地よく、また僕は笑ってしまった。

もし君が、この光景を見ていたら、怒るだろうか。呆れるだろうか。

多分君は、俺が死んだ後に笑うなんて不謹慎だ、と怒るだろう。その後、お前達にはついていけない、と呆れるだろう。そして最後に、一緒になって笑うだろう。

こんな馬鹿は、お前達しかいない、と言って。

僕達はいつも屋上にいて、相変わらず夕日は眩しくて、やっぱりホルンは音を外していて、これからも彼女は街のネオンが綺麗だと言って、それでも僕は彼女を愛して、きっといつまでも彼女は君を愛している。

何も変わらない。何も変わらなくても、僕達はまた君を思い出しては一緒に泣くだろう。

僕達なら大丈夫。もう多分、心中するなんて言いはいしない。

君が言っていた言葉を思い出す。

――生きていれば幸せなことがあるはずだ。

――お前にだってきつと……

僕はその続きを遮ってしまったけれど、君はなんて言おうとしていたのかな。

僕にだって、きっと幸せなことがあるはずだと、言いたかったのかな。

やっぱり僕には、分からない。世の中は悲しいことが多すぎて、幸せなんかどこかに埋もれてしまうかもしれない。

でも、とりあえずは、生きてみようと思う。

君の生きた、メリーゴーランドみたいなこの世界を。

彼女と一緒に、生きてみようと思う。

もしかしたら、耐えられなくなって、また死ぬなんて言うてしまいかもしれない。

そうしたら、キャラメルコットン取り出して一口、吸ってみるよ。その時は、もしかしたら、幸せの味がするかもしれないから。

最終話（後書き）

こんなワケの分からない話を最後まで読んで下さってありがとうございます。

この話は作者が。年前に執筆した短編小説を、今回「小説家になろう！」初投稿ということで、書き直したものです。故に、未熟な部分が多山ありますのでご指摘頂けたら幸いです。勉強になります。

さて、今回の話で登場人物の名前が一切出てきません。すべて「僕」「彼女」「君（たまに彼）」としか出てきません。もしかしたら「読みにくかったよこのやろー」って方がいるかもしれません。申し訳ありませんでした。しかし、彼ら3人はどこにでもいる、案外フツーの奴らだと思ふのです。ので、読者に身近に感じていただきたいと思います、あえて名前は書きませんでした。この話は短編3部作の中の第2部に当たります。他の話も、機会があれば書きたいと思います。そろそろ読むの疲れてきましたね。はい、それじゃあまたお会いしましょう。最後まで、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1199b/>

少年メランコリィ

2010年10月8日13時57分発行